

近畿大学中央図書館蔵『後撰和歌集』の紹介

一付、嘉禄本・貞応本『古今和歌集』一

名誉教授 村瀬憲夫

はじめに

本学中央図書館には『後撰和歌集』の写本（伝本）が一本所蔵されている。『後撰和歌集』は、勅撰二十一代集のうちの、第二番目に位置する歌集である。この歌集は、片桐洋一氏が「現存本に関する限り、『後撰集』は草稿本であるというほかない」（『後撰和歌集』〔新日本古典文学大系〕の「解説」）と断じたように、現存の写本は、多種にわたりその異同も多い。

そこで本学所蔵の当該本（以下「当該本」とのみ記す）について、ここで紹介しておくことも意味があるかと思ひ筆をとらせていただく次第である。ただし筆者は『後撰和歌集』研究の専門家ではないので、詳細な研究成果を報告できるわけではない。これまでの先学による貴重な研究成果をここにまとめて、紹介しておくことで、当該本が今後さらに研究され、また中世における『後撰和歌集』享受のさまを多くの方にお楽しみいただける機縁となるなら幸いである。

なお本学が所蔵している『古今和歌集』の写本二本（嘉禄本および貞応本、以下「当該嘉禄本」および「当該貞応本」と記す）についても、ここに紹介しておく。

§1 当該本の本学への伝来の経緯

当該本は、かつて竹田儀一氏の所蔵になり、1947年（昭和二十二年）十月十日に文部省が「重要美術品等」として認定したものである。国立博物館著作・編輯『國寶・重要美術品等（昭和二十二年）』（昭和二十三年十二月十日発行）の「二〇、後撰和歌集 二條為遠筆 一帖」の項に

本書は胡蝶装の堅本で、奥書に、

應安二年九月中旬之比以家正本書寫校合畢

相公武衛大將軍藤（花押）

とあつて、参議左兵衛督藤原為遠の筆なることが判明する。為遠は二條為世の曾孫に當る。公卿補任によつて彼二十九歳の筆蹟とする。爾來、後撰集の傳本世に少く、校勘に資するところ多き未知の一證本である。

と記されている。奥書によつて應安二年（1368年）の書写であることが分かる。この奥書は、文末に写真③として掲げた。

そして当該本はいつの日にか竹田儀一氏の手を離れ、いづれの日にか沖森直三郎氏の手へ歸したようである。小松茂美氏著『後撰和歌集校本と研究 研究編』（誠信書房、1961年）に「3 沖森直三郎氏蔵・二條為遠筆本」として掲げられている。『国書総目録』にも「沖森直三郎（応安二 二條為遠写 一冊）」とある。

その後、1970年（昭和四十五年）に本学の所蔵となる。その経緯については、「近畿大学学報」（第124号、1971年）に詳しく記されている。近畿大学校友会が母校の創立四十五周年記念に際し、図書館の寄贈を申し出、これを受けて、当時の小野村資文図書館長が「東京の著名書籍商」から購入したものである。

§2 当該本の体裁

体裁は、小松茂美氏著『後撰和歌集校本と研究 研究編』に詳しい。そのまま引用させていただく。

白地に緑と金で一面の青海波、なかに双鶴丸文を織りだした金欄地緞子の表紙、見返しには絹地に金泥を塗抹して金の切

箔・砂子・野毛を撒いた装飾が施された大和綴のこの一冊は、近世中期のころの改装とみられる。表紙の左端上に押された朱地に竜文の緑青型置文様のある題簽(12.6×3.3cm)には、本文と同筆で「後撰和歌集」とあり、改装に際して原装のそれが保存されたようである。本の寸法は、25.5×17.0cm上質の硬緻な鳥ノ子の料紙(25.4×32.4cm)の各10枚を重ねて中央で二ツ折に畳んでいる。(中略)

かなり速度のはやい運筆で闊達でのびのびとしたこの書風は、鎌倉末期の書の面目を遺憾なく発揮している。

§3 当該本の内容

当該本の本文等の素性については、片桐洋一氏「近畿大学図書館所蔵 二条為遠筆後撰集について」(『和歌史研究会報』第51号、1973年)が簡潔明解に説いている。それをここに簡条書きで紹介しておく。

- [1] 本来の本文のほかに二種類の校合が加えられている。すなわち (a) 本来の本文、(b) 書き入れ校合本文、(c) 貼り紙による校合本文である。
- [2] (a) の本来の本文は、小松茂美氏前掲著が説くような「二条家流天福本」ではありえず、「無年号A類本系・同B類本系」に近い本文であり、定家本の本文が確立しきっていない頃の本であろう。それは当該本と天福本との本文異同を具体例によって検証すれば明らかである。

※なお「定家本」とは、藤原定家が書写・校訂した本をそのように呼ぶ。この定家本は大きくは「定家無年号本」系と「定家年号本」系(天福本、貞応本等)とに分かれる(杉谷寿郎氏著『後撰和歌集諸本の研究』、笠間書院、1971年)。

- [3] (b) の書き入れ校合本文も、小松茂美氏前掲著が説くような「冷泉家流天福本」ではなく、「本来の本文」と同じくA類本・B類本に近い、いわば初期の定家本

である。

- [4] (c) の貼り紙による校合本文は、巻末の貼り紙〔当該本の奥書の一部〕(§5で写真④に掲げた)と同筆であるから、この奥書をもつ無年号B類本をもって校合貼付したことは明らかである。ただ注意すべきは勅物部分(定家の研究の跡を書き入れた部分)で、ここには他本に見えない注目すべきものがある。例えば巻十四の1015番歌(新日本古典文学大系本〔天福本を底本とする〕では1014番歌)の作者名の下勅物は「定家自身の手になる」ものである(§5で写真⑦に掲げた)。

片桐氏はこのように指摘したうえで、(当該本は)「初期の定家本の本文が一冊にまとめられているということにおいて、定家本後撰集の変遷を考えるうえに逸することの出来ぬ重要な伝本なのである」と結論づけている。

なお、当該本には、アクセントの注記を示す朱点が点じられた歌が3首(40、41、1260番の3首。ただし1260番歌は、新日本古典文学大系本では1259番歌にあたる)あることを、小松茂美氏前掲著が紹介し、「後撰集の伝本のうち、声点の加えられたものは、ほかに全く伝存しない。これは、その朱の褪色変化などから、この本の筆者たる為遠自らの加点と考えられる」と述べている。§5で写真⑤⑧に掲げた。

§4 本学所蔵の『古今和歌集』の写本について

本学中央図書館では、勅撰二十一代集のうち、第一番目に位置する歌集である『古今和歌集』の写本を2本所蔵している。いずれも「定家本」で、「嘉禄本」と「貞応本」の二種である。このうち「当該嘉禄本」については、すでに本誌『香散見草』(第42号、2012年)に、田中登氏が「本を写すことと切ること—古今和歌集を例として—」と題して、解説・紹介の労をとってくださっているのでご参照いただきたい。田中氏は「当該嘉禄本」の書写年代は「鎌倉の後期を下るものではないことは間違いないところである」と述べて

おられる。

「当該貞応本」は貞応二年（1226）の書写に関わる本で、田中氏によれば「世に伝わる定家本の9割方は、この貞応本といってよからう」という。「当該貞応本」の奥書を、§5で写真⑩⑪に掲げておく。

§5 写真解説（写真①～⑧は当該後撰和歌集、写真⑨は当該嘉禄本古今和歌集、写真⑩⑪は当該貞応本古今和歌集である）

写真①は巻頭部分である。

写真②は、末尾に記されている奥書の最初の部分である。定家本の代表ともいべき天福本をはじめとして、定家本に広く記されている奥書である。ただし当該本の奥書では最終行に「奉行文禁制文等略之」と記されているが、定家自筆の「冷泉家時雨亭文庫蔵 後撰和歌集 天福二年本」をはじめとする天福本では、この部分には、撰者の一人である源順の手になる「御筆宣旨奉行文」が記されている。

写真③は、当該本の書写年、書写者を伝える奥書である。

写真④は、写真③の奥書のある次の丁に、貼り付けられた奥書である。§3の〔4〕で紹介した貼り紙部分である。なお最終の三行に「可為末代證本之故以參議／定家所令書寫也」「於勤物者少々加之了」とあり、その前の行に小字で「本端有之」とある。この注記は、例えば「武田祐吉博士旧蔵・伝亀山天皇宸翰本」（杉谷前掲書に「定家無年号B類本」として紹介されている）は上下二巻からなり、その上・下各巻頭に、「可為末代證本……」とあることを指し示していよう。

写真⑤は、小松茂美前掲著が紹介した（§3参照）、アクセントの付された部分である。巻一、40番歌「梅花ちるてふなへに……」の「ふりてつゝ」の部分および41番歌「いもか家のはひいりにたてる……」の「はひいり」の部分に朱点が施されている。なお写真⑧の「今こんといひし許を……」の「さくさめのとし」の部分にも朱点が施されている。

写真⑥は、巻三の141番歌「おしめとも春

の限のけふのまた……」の歌の間（二行書きにされている141番歌の、その前行と後行の間）に、「行ききをおしめし春のあすよりはきにし方にもなりぬへき哉 躬恒」の歌が書き加えられている部分である。この「行ききを（行く先を）」の歌は、諸本には142番歌として登載されている。この歌を持たないのは「二荒山神社所蔵本」である（大阪女子大学国文学研究室著『後撰和歌集総索引』1965年）。片桐洋一氏「後撰和歌集の伝本」（『女子大文学』第17号、1965年）によれば、「二荒山神社所蔵本」には伝来途上に欠脱した部分があるが、この「行ききを」の歌は、その欠脱部分には属さない歌である。欠脱が原因でないとすれば、141番歌の次に配された歌「ゆくさきになりもやするとたのみしを春の限はけふにそありける」（諸本では143番歌）が、初句に「ゆくさきに」という語句を有していることから、当該本の筆者が目移りによって書き落とし、それを後に気づいて、挿入したことによるのかもしれない。

写真⑦は、§3の〔4〕で記した定家による「勤物」の一例である。巻十四の1015番歌「ふしのねをよそにそきゝし……」（新日本古典文学大系本では1014番歌）に関わっているものである。

写真⑧は、巻十八の1260番歌「今こんといひし許を命にてまつにけぬへしさくさめのとし」（新日本古典文学大系本では1259番歌）の勤物の部分である。この部分は、片桐氏は貼り紙と記しておられるが、貼り紙ではなく、「書き込み校合本文」の部分である。

写真⑨は、当該嘉禄本古今和歌集の「仮名序」の部分である。「あさか山かけさへみゆるやまの井のあさくは人をおもふものかは」の歌が書き記されており、嘉禄本の特徴を示している。

写真⑩は、当該貞応本古今和歌集の奥書（その1）である。

写真⑪は、次丁に記された奥書（その2）である。「文永三年」は1266年、「入道前大納言 融覚」は、藤原為家である。

【参照文献】

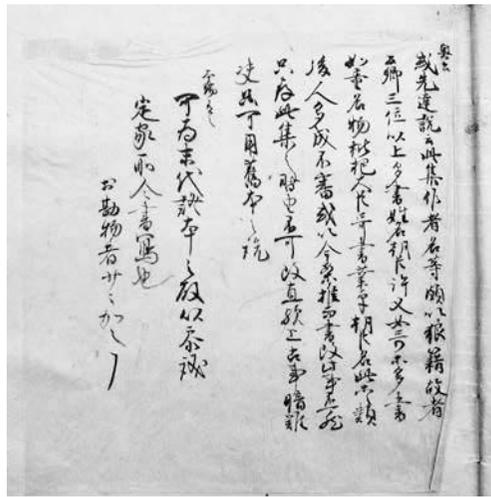
上記本文中に引用したものの他に以下の著書を参照させていただいた。

○岸上慎二氏著『後撰和歌集の研究と資料』（新生社、1966年）

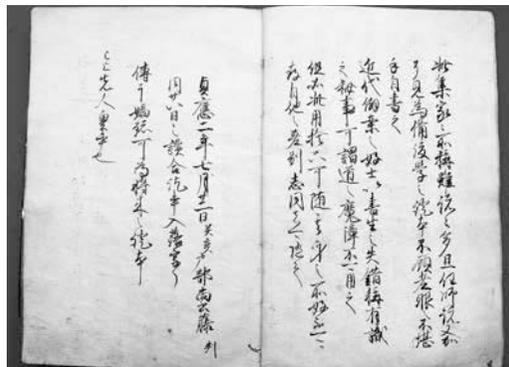
○田島毓堂氏編著『後撰和歌集研究史』（東海学園女子短期大学国語国文学会、1970年）



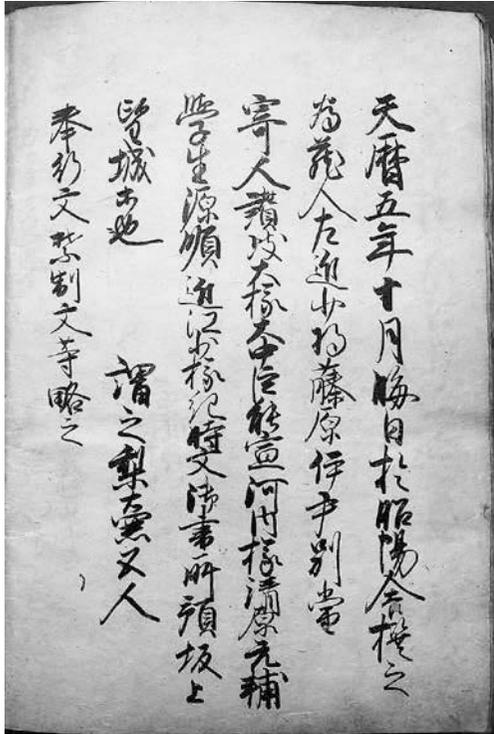
写真①



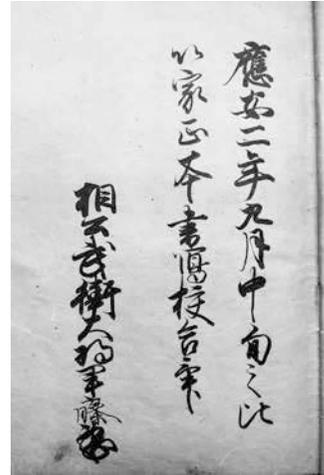
写真④



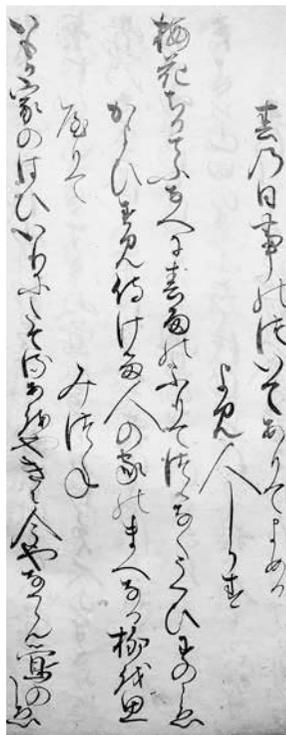
写真⑩



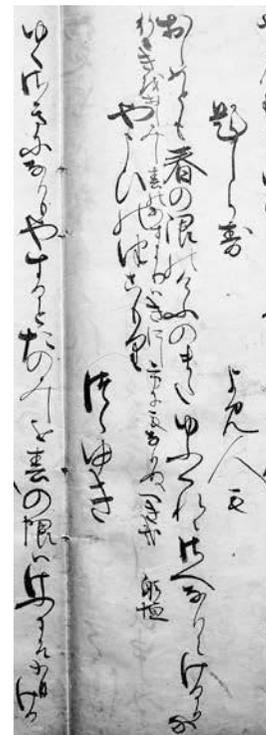
写真②



写真③



写真⑤



写真⑥

